

近畿地方の「自然災害伝承碑」代表事例

明治二十九年洪水石碑
(滋賀県大津市)



明治29年(1896)9月3日から12日の間の大雨で、下阪本村では全村700戸のすべてが浸水した。またこの洪水石碑にはこのときの水位とともに、万延元年、明治元年、明治18年の洪水の水位も記録されている。

二十八災 堤防決潰之地
(京都府福知山市)



昭和28年(1953)9月25日、台風13号により、同日午後9時頃には和久市の堤防が決壊し、福知山市では死者4名、家屋流失・浸水家屋約5千5百個を数えた。流域の綾部市、大江町(現 福知山市大江町)でも被害があった。

擁護璽 (安政地震記念碑)
(大阪府堺市)



1854年11月4日、5日(旧暦)の安政南海地震後に発生した津波によって、堺でも大きな被害を受けたが、住民は神社の広い境内に避難するなどして怪我をした人もいなかった。地震が強いときは決して船に避難してはいけないと記されている。

北但大震災伝承銅像
(兵庫県豊岡市)



大正14年(1925)5月23日に発生した北但馬地震(北但大震災)により城崎町湯島地区ではほとんどの家が倒壊し、全町が焼き尽くされ272名の死者を出した。当時の町長は、メガホンを片手に焼野を廻り、人々を慰め励ました。

紀伊半島大水害慰霊碑
(奈良県五條市)



平成23年(2011年)9月1日、台風23号による豪雨(紀伊半島大水害)により熊野川右岸の山腹が崩落。これにより対岸の宇井地区に土砂や河川の水が到達し、8名が死亡、3名が行方不明となった。この災害を後世に伝え、地域の発展を願って慰霊碑が建立された。

洪水記念碑
(和歌山県和歌山市)



明治22年8月、2日間にわたる台風大雨により、紀の川から出水。碑裏の銘には、県下の死者千人以上、村内の浸水は西入口で約1.8m、東山際で約0.9mを超える高さに及んだとある。